

何か2ch的な乗りのモン
ハン（多数の読者参加
希望）

竜神

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

この物語は、おバカオリ主がユクモ村に近いような開拓地域で、狩猟生活をしながら頑張るお話。

※タイトルにもあるように2chスレ・やる夫スレみたいなノリになりますので、注意してください。

- ・ヒロインとして他作品のキャラが多数出ます。
- ・時々キャラ崩壊、性格崩壊します。

・独自の世界観です。オリ主です。オリ要素が嫌いな方はご注意ください。

・アンケートを多数募集します。

・モチベアアップのために始めました。もう片方に集中して遅くなるかも。

※現在登場予定キャラの作品

・とある魔術の禁書目録（上条当麻、インデックス）

・とある科学の超電磁砲（御坂美琴、白井黒子）

・ガールズ&パンツァー（西住みほ、武部沙織、五十鈴華、秋山優花里、冷泉麻子）

・ソードアートⅡオンライン（キリト、アスナ、リズベット）

・鋼の錬金術師（アルフォンス）

・狼と香辛料（ホロ）

・スターオーシャン2（アシュトン、プリシス）

目次

- 1 ハンターズギルドに裸装備で来た伝説

ハンターズギルドに裸装備で来た伝説

それはある晴れた日のこと、一台の荷車がある峠の道を歩いていった。

道路は舗装がされておらず砂と岩で荒れており、その上を通る荷車は大きく揺れた。

荷車を操っているのは猫だった。ただし、動物の猫ではない。アイルーと呼ばれる高い知能を持った獣人だ。人との意思疎通も可能で、荷車に繋いであるガーグアの手綱をにぎっているのも、そのアイルーである。

アイルー「旦那しゃん、もうすぐ開拓地域に着くにや。支度するといいにや」
??? 「んん……! ふああ……」

アイルーからの声に、荷車の中から少年が体を起こした。その姿は一目でみすぼらしいとわかるような恰好だった。服と呼べるような服はなく、腕と脚と腰巻にインナーを身に着けているのみ。まるで放浪者の姿といったふうである。いや、放浪者の方がまだまともかもしれない。

そんな彼の名は、アルメンⅡアンカース。普段の名はアレン。

アレン「これが俺の……ハンター伝説の幕開けだー……!!!」

アイルー（防具なしとかムリゲーにや……）

伝説級のハンターを目指す、まだ普通の少年である。

アイルー「ここが開拓地域の最前線の村、デリーだにや」

さらにしばらく揺られた後に着いた場所は、共和国と呼ばれる国の最西部に位置する
国境。別名、開拓地域である。

アレン「ありがとな！この借りは依頼で返すから、頼ってくれよ！」

アイルー「別に商売のついでだったし、礼なんていいにや。依頼するかどうかは考え
とくにやー（すぐに死ぬだろうけど）」

運んでくれたアイルーに別れを告げ、片手剣を持って荷台を降りる。村の前の粗末な

門をくぐると、まずは仄かに硫黄の匂いが漂ってきた。

アレン（ユクモ村やジパングと同じ匂いだ。温泉入りて〜！）

以前に兄に連れられて行った時の記憶を思い出し、笑みが浮かぶ。

アレン（つて、いかんいかん。まずはギルドでハンター登録だ）

一番上に見える大きな建物がおそらくこの村のギルドだと予測し、階段を上る。

途中で周りの店を見て、雑貨屋、鍛冶屋、食事処、宿屋らしきところを見つける。

アレン（農場はこっちにはないのかな？ 兄貴は毎日嬉しそうに耕してたけど）

階段を上がり、一番上の建物に入ると、そこは以前見たギルドと同じような造りに、緑色のロングスカートにエプロンドレスを着た受付嬢がいた。

めちやくちや気だるげな雰囲気だ。

アレン「あの、もしもし?」

???「ん〜。ようこそ、ハンターズギルドへ。ただ今所属してるハンターがいないので、依頼はこの用紙に書いて、その掲示板に貼つといてくれですう……」

アレン（ハンターいないんかい……!）

アレンがこの村に来た理由は、未開拓地域を探索できることと、新しくできたばかりの村だという、2つがある。だからハンターがいなくても不思議ではない。むしろアレンにとっては、万歳な状況である。

それにしたって態度がひどい、と思いながら彼女に言った。

アレン「いや、俺はハンター登録に来ただけど……」

すると、ピクリと彼女が反応し、むくりと体を起こした。

???「ようこそ、ハンターズギルドへ! 受付嬢をさせていただいてる翠星石といいますですう! 本日は、ギルド移籍登録でよろしいですか?」

さっきとは打って変わって、輝かんばかりの営業スマイルで対応してきた。受付嬢って怖い、そう思った。

アレン「あ、移籍登録じゃなくて新規登録です」

翠星石「へっ？じゃ、じゃあ装備を……」

アレン「いや、これ一張羅だけ」

翠星石「……………はあゝゝゝ。こつちの手合いですか」

ポカンとした表情で俺の全身を見渡すと、再びガツカリといった表情になり、盛大に溜息をつかれる。

翠星石「はいはい、新規ですね。「カタカタ」じゃあ武器の登録から始めるです」

アレン「あ、ああ……………この片手剣で」

コロコロと変わる翠星石の態度に唾然としながらも、俺は家から持ってきた片手剣を差し出す。

翠星石「んじゃ、とつととスキャンしちゃうですよー」

翠星石はピー、と手に持った機器から出た光を武器にあて、コードで繋がれたモニターを見て確認し始めた。

翠星石「ん、んん!？」

そしてモニターに現れた結果に、翠星石は目を見張ると、

翠星石「と、盗掘品ですううううううう!!!」

と叫び、大急ぎで集会場から出て行ってしまふ。

アレン（……………て、なに？）

今聞き捨てならないんだけど!?

アレン「待て！盗掘品ってどういうことだ」「チエイサー……！！」よ?!?!
!?!?」

翠星石を追ってギルドを出た俺の眼前に、ものすごい衝撃と硬い物がぶちあたる。
そしてそのまま、深く意識が沈んでいったのだった。

S i d e アレン

その後どうなったかというと……………。

??? 「へー、これが伝説級の単一武器なのね」

翠星石「ランク9、虹怪鳥・ジーネの爪から作られた武器ですう」

アレン「おーい」

俺は両手足を縛られて、ギルドの隅に転がされていた。

先程から何回呼びかけても、ガン無視である。

??? 「にしても、あいつもバカよねー。英雄の武器を盗み出すとかありえないっての」

翠星石「ミコトもそう思うですか？しかも双剣なのに片方だけですし、バカ丸出しですう」

ミコト「そうよねー。んで、どんな処分が決まるの？」

翠星石「英雄の武器を盗んだんですから、悪いと処刑。最前線を退いているところを考慮すると共和国追放つてところですか？」

アレン「いやいやいや！違うから！ちよつと待つてくれつて！」

転がる肉体を転がして、2人の足元にまで行く。

ミコト「うわっ！」

翠星石「キモイ動きしやがるですう」

そういう反応は地味に傷つくのですが。

アレン「それより、俺は盗んでなんかいない！」

ミコト「犯罪者つて、皆テンプレな回答言うのよねー」

翠星石「こういうやつ初めて見たです」

アレン「ああ!? 端から信用されてない!」

翠星石は呆れた視線で俺の武器を持ち上げると、

翠星石「いいですか? おめーが持ってきた片手剣って言った武器は、2大陸で一つしか製造されていない双剣の片方なんですう」

アレン「え? (双剣だったの?)」

ミコト「で、そういう武器は盗難を防ぐために、大抵持ち主と一緒にギルドデータに登録されてるのよ」

アレン「そ、そうなのか?」

翠星石「そうですね。しかも新種の双極竜を討伐したアシュトンⅡアンカースの武器を持ち出すとは、ふてえ野郎です」

アレン「ちよ、ちよっと、俺はそのアシュトンの弟なんだよ! アルレンⅡアンカースという名前なんだ! 武器は家から持ってきたもので」

翠星石「はいはい、嘘乙です。ハンターズギルドの登録名簿には家族内容も含めて入ってるんですから、照合すればわかることで……………」

そう言つて、カタカタと情報を打ち込んでいた翠星石が一瞬固まる。

ミコト「……ちよつと」

翠星石「ま、まあ、名前なんてちよいと調べりや、わかることですし？ 正式な身分証明書がない以上無実とはいかないですよ？」

アレン「えーと……、身分証明になるかはわかんないけど、以前に兄貴の狩りに付き合つたとき、変な紙みたいなのを作つたぞ？」

翠星石「それは今どこに？」

アレン「インナーの中」

ミコト「この変態が!!」

アレン「ごふう！」

蹴られた。めつちや痛いです。

アレン「な、なんで蹴るんだよ……。ちゃんとポケットに入ってるっての……」

ミコト「へ？」

翠星石「なんて紛らわしい言い方しやがるですか」

その後、ごごそそと紙を発見し、再びカタカタと作業をした後、

翠星石「……………はあ、解放するですう」

ミコト「ちょ、マジで!？」

翠星石「マジですう。このインナーのみ武器なし野郎は、アシュトンIIアンカースの正真正銘の弟です。写真付きで仮登録されてたです」

ミコト「ええええええ……………」

胡散臭げに俺を一瞥したミコトは、身体を縛っていた縄を渋々と切った。

アレン「いつつ…………、とにかくこれで無実だと証明されたよな」

翠星石「武器持ち出しの件が残ってるですけどね」

アレン「あゝ、あれは兄貴が護身用にくれたもんなんだよ」

ミコト「ハンターナイフ替わりってこと？それで双剣の片方だけを渡すあんたの兄さんもおかしな人ね」

アレン「ぐっ、いや、それは…………」

ミコト「まあいいわ」

会話をする気がないのか、話を適当に打ち切ったミコトは翠星石に向き直った。

ミコト「それで？私の移籍登録は終わったの？」

翠星石「もう終わってるですよ。はい、どうぞ」

アレン「ハンターだったのか？」

ミコト「見てわからない？これでもスチュアートじゃ、そこそ腕が立ってたのよ。ハンターランクだって……3!？」

アレン「うおっ!？」

フンと胸を張って話していたミコトは、ギルドカードを確認して驚愕の声を上げた。

ミコト「ちよつと！ちゃんと私のハンターデータを確認したの!?!私のランクは5のはずよ!？」

翠星石「残念ですけど、それが規定になってるんです。だからそれで合ってるですよ」

アレン「規定？」

翠星石の言葉に首をかしげるアレン。それを見た翠星石は、言い聞かせるように言った。

翠星石「知つてるとも思いますが、ここは開拓地域です。開拓地域前線じゃ、モンスターの得意個体や変異種なんて、よくあることです。そんな奴らに無謀に挑んでは死ぬハンターを軽減させるために、ギルドは村や街から来たハンターのランクを2つほど下げて移籍させるんです」

アレン「へー」

ミコト「だから私のも下がってるっていうの」

翠星石「いやならクエストこなすか、戻るかのどっちかですねえ」

ミコト「……………ふん！」

怒りの表情を浮かべるミコトだったが、さっさと上げてやるわ！、と啖呵を切ると、ギルドを出ていった。

アレン「いいのかな……」

翠星石「開拓地域じゃ珍しくねえ反応ですう」

翠星石は、そうこぼした。

翠星石「あ、そうそう。お前さんの持つてきた武器はランク上の規定や単一登録で使えねえですから。さすがに武器なしは論外ですから、後でまたこっち来るです。訓練所が出来たときのための初心者用武器が来てるんで、貸してやるですう」

アレン「あ、ありがとう」

翠星石「訓練所が出来たら取り上げるですから。せいぜい金貯めて武器を買うです
よ」

その後も口は毒を吐いてはいたが、内容はこちらを心配してのものだった。
ドジなどともありそうだが、悪い人ではないらしい。

ギルドから出た後、俺は他の人に挨拶回りに出かけることにするのだった。